

山田文雄氏著工業經濟學（第一分冊）

伊藤久秋

本書は東京帝大山田教授の工業經濟學第一分冊であつて全冊の前半に該當するものと云ふ。第一分冊たる本書は二編に分たれ、第一編は工業經濟學の基礎概念を、第二編は工業經濟理論を取扱ふ。

先づ氏は工業の意義を確立したる後、工業經濟學の本質を問題とする。工業經濟學は氏によれば工業經濟現象を対象としてそこに支配する因果的法則を明かにする社會科學である（二三）。更に此工業經濟現象を現代社會の工業經濟現象と解する限り、此學問は更に限定されて、高度資本主義に於ける工業諸現象を經濟理論的に説明する社會科學となる（三七）。従て工業經濟學は理論經濟學に對しては其應用たる地位にある（二〇）。

第二章に入つて現代工業技術の特質、更に機械及び設備、

就中機械につき、其意義、性質、その技術的影響が論ぜられ、又現代工業に於ける原料、勞働の夫々に論述が加へられる。第三章に於て著者は工業の經營形態を取扱ひ、經營形態の發展を略叙し、工場制度、並に現代の手工業を論じて、第一編を終つてゐる。

第二編の第一章は工業に於ける費用法則と題し、代替の原理、費用と生産量との關係、供給價格と供給量、計畫費用曲線につき論述する。第二章は工業立地論であつて、立地論上の基礎概念、立地決定の根本原理、具體的實例への應用、現實化の諸問題、立地變動を説く。

著者の論述は飽くまで平明、ただ數式が多過ぎる嫌はあるが、或程度の理解をもつ讀者に對しては妨にならない。又參考文獻の舉示も親切であるから、學問としての工業經

濟學に接したい人にとつて近來の良書と考へる。

著者は工業經濟學を理論經濟學の應用とし、政策學と異なる價值判斷の混入を拒否する立場をとる。この立場は私共の賛同を惜しまない所である。ただ著者は工業政策學なるものの存在を同時に認めらるる様子であるが私共は此點にも疑問をもつ、併しこれは當面の問題ではないから今論ずる必要はない。而て著者の右の立場に照應して本書には從來の類書に見ざる理論的色調が強く浮き出てる。尤も第二冊の刊行を待たなければ全體の論述が此調子を以て進行するものであるかは知られないが、本冊の關する限りに於て、確に此點は本書の一特色である。工業政策、或は工業經濟の題名の下に、工業に關する一切の知識を盛り上げたるの感を免がれなかつた往時の混沌から、理論のコスモスが美はしく立昇つて來たのは、當然の事ながら私共の喜びでなければならぬ。

更にも一つの特徴は工業立地論を重要な地位に於て取入れられた事である。此點は拙著工業經濟理論に於て立地論に一章を割いた前例を除き他には例がないと思ふ。私の

ささやかな試みが、より、有力なる後繼者を見出したことは私の特に欣快とする所であるが、かかる個人的立場を離れて此點にも我學問の進歩が表現されてゐることを喜びたい。工業經濟學に立地論が取扱はれるならば、理論經濟學にもより、抽象的な形で立地論が組入れられねばならない。然るに從來の理論經濟學は空間の存在を無視する所の完全競争の假定を立て、此理論を入る、餘地をなくしてゐる。私は此事を不當と考へ多少の見解を公にしたが我學界は此問題に對して殆ど無理解の態度をとつてゐる。流石にピグーは此方面に開拓の一步を進め、⁽¹⁾ ウェーバーの立地論を簡略ながら紹介せる事は此一派の學者に於ては恐らく最初であらう。私は山田教授から理論經濟學に於ける立地論の取扱につき聞きたい氣がする。

(1) A. G. Pigou, *The Economics of Stationary States*, 1935.

工業經濟學を理論經濟學の應用とすれば工業經濟學の理論はより、具體的なるべきは當然である。然らば如何なる理論を理論經濟學に委せ、如何なる理論を工業經濟學に入るべきかは相當困難の問題であり、恐らく著者の主觀に入る

る餘地大なるものと思惟する。從て本書に於ける山田教授の『費用法則』の展開をも著者獨自の計畫に出るものとして敬意を表するに吝でない。併しなほ私は著者の親切に發するものとは云へ叙述の或部分は餘りに經濟原論的なるの感を受け得ない。例へば限界生産力均等の法則の數學式による説明の如き割愛されて然るべきものではないだらうか。

次に本書の讀過に當り疑問と感じた二三の點を記して置きたい。——著者は通常大量生産の利益と云はるるものに二つの意義があるとし、その一は短期間に於て生産量を増大することが單位費用の節約を生ずる事であり、その二は長期間に互つて即ち技術の變更を許して生産規模を擴大する事が費用上の利益を生ずる場合であるとされる。而て第一の場合を大量生産の利益と呼ぶことに對し、第二の場合を大規模生産の利益と呼んで兩者を區別され、(一五九頁)特にこの區別に重大性を與へられる。(一七六頁註四)併し私は此區別には可成の困難が伴ふのではないかと思ふ。氏によれば技術の變更を許して生産規模を擴大する事が大規模生産の利益を生ぜしめる。併し又技術の進歩にのみ大

規模生産の利益を認められるものでないことは、勞働の組織化、原料費の節約(一九七頁)原料大量購入の利益、心理的に需要者の信用を博し、廣告費販賣費等を節約し得ること等を挙げらるる(一九八頁)ことによつて知られる。併しここに列擧される利益は氏の所謂大量生産に伴つても生ずる利益ではないだらうか。生産設備の變更とは本質的關係をもつてゐるとは思へない。

大規模と云へば固定的設備の大なることを聯想するのが普通であるが、固定的設備は生産手段の一つに過ぎず、これのみによつて規模の大小を云々すべき理論上の根據は存在しないと思ふ。規模の大小は、生産手段の全體、即ち組合されたる全生産要素の量によつて云々さるべきものと考へる。從て氏の如き意味で大量生産と大規模生産を分つことは不當であると見る。次に短期的考察と長期的考察の區別の重要なことは勿論認める。長期的考察にては技術の進歩が眼中に入るが、技術の進歩は一方的に固定的設備の擴大(從て高價)に導かず、却て其縮小(即ち其低廉化)にも導くことを同時に注意すべきである。

山田氏の工業立地論は既に經濟論集上に於ける「工業立地論の根本問題」「工業立地論現實化の諸問題」なる論文により發表されてゐる。本書第二編は大體此論文を収録したるものである。氏は右の論文に於て私の所論に屢々觸れて論評された。それに對し私はなほ答辯を致さないでゐるが、その中の數個所につき氏の説に啓發され、同意するを憚らざると共に、又疑問の容易に去り難いものもある。本稿にては僅々一二の點につき所感を略記するにとどめる。

工業立地論は氏によれば工業生産が如何にして一定の場所に定位するかを經濟學的に説明する理論である。(二〇二頁)これに對し私は勿論何等の異論をもたない。然るに氏は註に於て山西正鑑氏と共に私の説(工業經濟理論)を掲げ、私が工業立地の問題を、材料産地、消費地、勞働供給地に對し如何なる地理的關係にある地點に工業の立地は定まるやの問題と解すると云へることに不十分の意味を表され、立地論は立地の事實を經濟學的に説明すべき事が、その重要な事柄である事が明示されなければならぬと云はれる。私は立地問題とは何ぞやを云ひ、氏は立地論とは

何ぞやを云はるる、兩者のピントの異なることを論外とするも、工業經濟學に於て立地を論ずる場合、工業立地論とは立地の事實を經濟學的に説明するものなることを事更明示する必要があるであらうか。それは寧ろ不必要なる事であるとは考へる。恰も理論經濟學に於て、利子論の目的は利子を經濟學的に説明云々と云ふことの不必要なる如く。氏が特に「經濟學的」と傍點を附して此點を重視さるるが故に此疑惑を述べて置く。

次に企業の總利潤を立地要素と見らるる事にも私は敢て反對しない、併しこの説の根柢となつてゐる氏のウェーバー批評に對し私は疑をもつ。氏によればウェーバーは各費用項目に關して夫々費用利益を考へ、運送費の最小なる地點に先づ立地が成立し、然る後勞働費の最小なる地點との間に再び立地の争が起ると解する、然るに事實は運送費の最小なるA點と勞働費の最小なるB點以外の第三點Cに立地が定まることがあり得る。即ち運送費はAに於けるより大であり、勞働費はBに於けるより大なるC點が立地となり得ると説かれる。最後の點は勿論正しいが、私が

指摘したいのは、ウェーバーは運送費最小の地點から立地が移動して、勞働費最小の地點に至るや否やを問題とはせず、運送費最小の地點と、勞働費に於て此地より低廉なる他の多くの地點とを對照してゐると云ふ事である。視野に入り來るものはB點一つではなく、苟もA點より勞働費低き一切の地點であり、從て立地がC點に定まり得ることはウェーバーの理論に於て當然の事なのである。山田氏はウェーバーを此點で誤解されてゐると評する外はない。同一の誤解は數年前野副重次氏(經濟學論集昭和六年八月號)の論文にても犯かされ、此誤解の上に全論文が築かれてゐることに驚いたことがある。

以上私の紹介は紹介文の體裁を成さなかつたかも知れない。著述の論評は著者と同等以上の苦心を経験した者へのみ許される。私もこれを知らないのではない、にも不拘私は著者の苦心を買ふこと少く、其瑕疵を云々する事のみ多かつたかと思ふ。著者の寛恕を乞ふと共に、第二冊の公刊を讀者と共に待ちたい。